姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一編を選考するものです。

第一回目の今回は、全国から千二百十一点の力作が寄せられました。

〈生きることとは創（つく）ること〉――藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはずです。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

姫路文学館

目次

■中学生部門
最優秀賞「旅路」兵庫県 姫路市立菅野中学校 二年 黒田 智子……4
優秀賞「私の小さな夢」兵庫県 小林聖心女子学院中学校 一年 仲 優里奈……7
佳作「無限に広がる未知の世界」兵庫県 小林聖心女子学院中学校 二年 吉岡 杏……10

■高校生部門
最優秀賞「出逢い」兵庫県立 姫路西高等学校 一年 藤阪 希海……13
優秀賞「強く生きたい」兵庫県立 姫路西高等学校 一年 寺本 栞那……17
佳作「手のひらの温度」兵庫県立 姫路商業高等学校 一年 浦野 楓香……21

■一般部門
最優秀賞「眼」兵庫県 伊丹市（会社員） 本田 菜美……25
優秀賞「ブルー・インパルス」兵庫県 姫路市（高校常勤講師） 倉垣 裕太……28
佳作「ある日、棺桶の中で」愛媛県 松山市（会社員） 板東 英樹……32

■概要……36

第一回　藤原正彦エッセイコンクール　入賞作品集

中学生部門　最優秀賞

旅路

兵庫県　姫路市立菅野中学校　二年
黒田　智子

私にとって、夏休みのビッグイベントといえば旅行だ。出発前夜のわくわくして、眠れない気持ち。快適な旅行を思うあまり、ついつい重くなる荷物。それらは、この特別な時にしか味わえないものである。

まず、旅行の醍醐味として挙げられるものに、行先が「非日常」だということがある。歩いたことの無い道や、初めて入るお店。話したことの無い人に、初めて食べる物。また、街路樹や看板など普段よく目にするものでもいつもとは違うように見える。そこで繰り広げられるほとんどの物事が初体験であり、非日常だと思う。

そして、非日常であるなら、そこで自分は何者にでもなれる。普段の学校生活では「あの子はこういう人」というイメージがある。おとなしい人がはしゃいでいると、意外に感じたり、全員が同じ事をしても一人一人感じ方が違う。逆に言うと、普段の生活ではイメージに縛られているように感じる。しかし、旅行先ではどうだろう。誰も自分の性格を知らないし、その後の生活にも関わらないのなら、少しくらいハメをはずしてもいいはずだ。

知らない人に話しかけて不思議な顔をされても、全てを思い出に出来る。これが旅行のいいところだ。

もう一つ、魅力がある。それは、「一度きり」であること。私は、毎年数回旅行に行く。でも、よほどそこが良くないと同じ所に何度も行くということはない。つまり、そこに行くのは一度きりだ。もう一生来ないかもしれない特別な一時だから、一秒一秒を目いっぱい楽しもうとする。いつもと同じように時間が流れていても短く、尊く感じるものだ。

私が幼い頃、一週間程外国に旅行した。その一週間はすばらしいものだった。しかし、四日目をすぎたころから幼い私の心も少しずつ旅の終わりを感じていた。最終日、帰りの飛行機の中で私はずっと泣いていた。「どうして帰るの、ずっとここにいたい。」と思っていた。そうして、私はインドに帰った。そう、その時、私はインドで暮らしていたのだ。インドも日本人の私にとっては充分異国の地だが、物めずらしく感じたのは最初の数ヶ月だけで、後は日常と化していた。今は、そんなインドを恋しく思うことも多々ある。しかしあの頃は日本が恋しくてたまらなかった。そんな自分が今、とてもおかしく感じる。つまり、私はどこにいても非日常を求めて旅に出るのだろう。そこがあこがれの地であっても住んでしまえば、いつか必ず日常になる。私は一度きりだから旅行は輝くのだと思う。

また、旅行には「一期一会」という言葉がよく似合う。旅行先で出会った人達は、私が

そこに行かなければきっと一生言葉を交わさなかった人達だ。

先日、ハチ北高原に旅行に行った。スキーシーズンではないので私達を含めても四組しか宿泊者はいなかった。その内、二組の方と話をしたが、もうそんな機会もないだろう。そもそも六十億人も人がいる世界だ。年代も住む所も違う彼らにシーズンオフのホテルで出会えたことが奇跡である。そう考えると、普段時間を共にしている人達との出会いという奇跡には運命を感じる。旅行に行くたび、私はそれを思い知らされている。

私が今住む姫路も、観光地だ。国内だけではなく、外国からの観光客もよく見かける。私達、姫路市民にとっては見慣れた姫路城への道を、目をキラキラさせながら歩く人がいる。それを見ると、なぜだか少し誇らしくなるが、それが私の中で日常であることは変わらない。私達の日常は彼らにとっての非日常だ。私の生活をうらやむ人がいて、私は彼らの生活をうらやむ。日常があるから、非日常が輝くのだ、と私は思っている。もちろん、日常だって嫌いではない。慣れ親しんだ友人と会うとほっとするし、勉強だって大切だ。少しくらい辛いことがあっても、非日常を楽しむために必要だと思えば全然平気だ。ただどうしても我慢できないことがあれば、とびきりの非日常に逃げこんで体勢を整えてから、日常と戦うつもりだ。

中学生部門　優秀賞

私の小さな夢

兵庫県　小林聖心女子学院中学校　一年
仲　優里奈

私は、銀閣寺が好きだ。ハッキリ言って、大好きだ。

USJで一日遊ぶよりも、私は、銀閣寺の銀沙灘（ぎんしゃだん）を眺め、白砂の美しい庭園を愛でていたい。こんな私は、特別天然記念物並みに、珍しい中学生なのだと思う。キラキラした華やかな金閣寺ではなく、銀閣寺が良い。銀閣寺には、様々な理由があって銀箔が貼られなかったというが、私は、銀箔を貼らないのが正解だったと思う。私の前世は、足利義政公に仕える人だったに違いない。

春に学校の遠足で二条城に行った時も、私はウキウキしていた。他の人たちが皆、つまらなさそうにしている中、私は一人、「ここで大政奉還が行われたんだぁ。」と、感激すること、しきりだった。徳川慶喜公は、その時どんな気持ちだったんだろう。悔しかったのだろうか。それとも、ホッとしていたんだろうか。

うぐいす張りとよばれる、歩くとキュッキュッと音が鳴る床を歩いた時も、私は胸が高なった。もしかしたら、私は一五〇年前に慶喜公が歩いた同じ床を踏んでいるのかもしれ

ない。私は、昔から、城やお寺を見ては、一人で「数百年前、ここにこの場所に歴史上の有名な人がいたんだ」と思い、その姿を想像するのが好きだった。

銀閣寺も二条城も好きだが、最も好きなのは、龍安寺だ。エリザベス女王も大絶賛したという、この枯山水庭園は、私もひどく感動した。この庭園の前では、誰もが無口になり、その美しさに圧倒される。大声でしゃべる人などいない。龍安寺は地味だと言う人も多いが、日本人だけでなく、外国人観光客もとても多く、石庭を、座って、ただ黙って静かに見ている。

水を石で表現するなんて、今の時代で誰が思いつくだろう。しかも、石を見て気持ちが落ち着くなんて、「奇跡」に近い発見だ。固い石が所々の場所に散らばっているだけなのに、見ている私の心はやわらかくなるような気がする。

私は、この石庭を、一時間、二時間、いや、一日中見ていることができる。ここに住んで、石庭を見ながら、美味しいお抹茶を点て、一日中過ごしたい。本気で、そう思っている。一日中石庭を見て過ごせるなら、いつもははかどらない私の勉強も、きっとはかどるに違いない。

私には、小さな夢がある。京都には、龍安寺の他にも、美しい枯山水の庭園がたくさんある。建仁寺、妙心寺、大徳寺、曼殊院…。それらの庭園を全て見てまわって、枯山水を

堪能したい。そして、いつか、小さな家を建てて、庭に自分の枯山水を作りたい。
将来、枯山水を作って眺めている私を、足利義政公は、どのような気持ちで見ているのだろうか。この、世にもまれな中学生を「うん、なかなか、見込みのある奴じゃ。」なんて言ってくれるんじゃないかと、私はひそかに思っている。

中学生部門　佳作

無限に広がる未知の世界

兵庫県　小林聖心女子学院中学校　二年
吉岡　杏

本が好きになったのはつい最近のことだ。それまでは本になど、全く興味がなかった。小学六年生の時、ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』に魅了され、物語にどんどん引き込まれていく感覚を知った。そしてこの本により、ある友人と仲良くなり、無限に広がる読書の未知の世界に誘（いざな）ってくれたのが彼女であった。

その友人とは小学一年生から同じ学校だったものの、一度も話したことがなかった。しかし小学六年生の時、一緒に学級委員をすることになった。もちろん初めはお互い気を遣い合い、今のような関係になるとは思いもよらなかった。そして、学級委員として一緒に沢山のことをしていくうちに打ち解けていき、『はてしない物語』はお互い大好きな本だということを知った。それから仲は深まっていき、今では特別な友人となっている。

本を勧め合い、これ以上本の話が合う人はいないだろうと思うほど好みが合った。その友人が面白いと言えば私も面白いと思うし、面白くないと思えば友人も面白くないと言った。しかし、ある本だけは違った。友人は面白いと言って何度も勧めてくれるが、一向にペー

ジが進まない。ある本——それは吉川英治の本だ。友人と私は歴史に関しては天と地ほど知識が懸け離れていた。友人はまさに歴女、一方私は歴史があまり好きではない。普段も歴史の話が出来ず、早く歴史を好きになってと言われていた。そんな私にとって吉川英治の本はザ・歴史。良さが分からない。文章は上手だけれども難しくて文語体。読もうとしても内容が頭に入って来ない。ただ意味も分からない文字を読み辿っているだけのように思う。今まで、吉川英治の本でたった一冊、『高山右近』を十二ページだけ読み進めた。気が遠くなる。面白くもない。なぜ友人はこんなに難しい文章を面白いと感じ、読むことが出来るのか。それは私には分からない。友人が歴女だからなのか。昔から本を沢山読んでいたからなのか。

ある時、友人に夢枕獏の『神々の山嶺』を勧められた。こんな難しそうな本…と読む気になかなかなれず、無理矢理といった感じだった。しかし読み始めると、やめられなくなるほど物語に引き込まれた。でも、この本も難しい本だったと思う。なにしろ夢枕獏の作品は歴史ものが多い。それも吉川英治と同じような本だ。その時から『神々の山嶺』は一番好きな本だった。

こんな本を一番好きになれたのなら、私も吉川英治の本を読めるかもしれない。そう思いながらも、本棚にずっと放置してきた吉川英治。しかし今年の夏、やっと一歩進める機会を得た。

そのきっかけは社会のレポートだった。歴史遺跡を一つ取り上げ、レポートを書くという宿題だ。私の家の近くには楠木正成という武士が足利尊氏との合戦の際、陣を張ったとされる場所がある。少し興味を持ったので楠木正成を調べると、中世で活躍した武士であり、歴史的に大きな意味を持つことになった戦いが大阪にある千早城で行われたと分かった。千早城を取り上げ、レポートを書くことにした。この時代のことはあまりよく知らなかったが、沢山の参考資料を読んでいくうちに時代の流れがつかめていき、楠木正成の戦略と、天皇に最後まで忠誠を尽くした姿に感激した。初めて歴史上人物の中で憧れを持つことが出来た。

そのことを友人に伝えると、とても喜んで、吉川英治の楠木正成や足利尊氏、新田義貞などの武士を中心に描いている『私本太平記』を貸してくれた。友人は何が何でも、これ一冊読めば吉川英治の本を好きになれると言っていた。私も吉川英治の本を楽しんで読めるようになりたい。その一歩として、よく知っていて興味のある人の話なら私でも読めるのではないか。友人もこのように歴史上に憧れる人が出来て、吉川英治の本が読めるようになったのではないかと思う。

私は今、吉川英治の文章と格闘している。いつ、友人に追いつけるのだろう。いつ、吉川英治の本を楽しんで読むことが出来るのだろう。まだまだ道は遠い。

高校生部門　最優秀賞

出逢い

兵庫県立姫路西高等学校　一年
藤阪　希海

遠出をするのが好きだ。買い物でも、美術館の見学でも、ただの散歩でもいい。よく知らない道を歩きたい。その曲がり角の向こうに何があるのだろうかと、わくわくする。大抵の高校生の女の子は、友だちと街へ繰り出すことが好きなのだと思う。そう、友だちと。私だって、嫌いな訳じゃない。ただ、この夏、「ひとり」の楽しみ方を知ってしまったのだ。

夏休みに大学の見学をしなさいと高校で言われ、何となく神戸の大学を見に行った。電車を乗り間違えないかと、始終ドキドキしていた。駅の外に出た時、真夏の太陽の眩しさに目がくらんだ。急な坂道と、都会の真ん中に佇む木々に、神戸の風を感じた。

大学見学の帰りは、バスに乗った。駅に向かうつもりで乗ったバスは、六甲のロープウェイ乗り場に到着し、終点だと告げた。運転手さん以外は、私と若い男性しかバスに乗っていなかった。頼れる人は、傍にいない。

「すみません、このバスは、駅に向かいますか」

思い切って、その男性にバスの行き先を尋ねた。その人は一度確認してから、
「はい。このまま乗っていて大丈夫ですよ」
と教えてくれた。ほっとして、思わず笑みが浮かぶ。お礼を述べると、その男性はこの辺りは初めてですか、と私に尋ねた。大学見学に訪れたのだと伝えると、
「ああ、高校生なんですね。大学は、自分の目で見て決めた方がいいですよ」
その人は、大阪の本屋でバイトをしているのだと言っていた。一年ほど前まで、難関大学でのキャンパスライフを送っていたらしい。オーストラリアに留学に行った、とも。
「――オーストラリアの生活が合わなくてね。頭では動こうとしても、体が動かなくなるんです。遂に倒れちゃって、病院に担ぎ込まれて。日本に帰って来て、今は大学を辞めてアルバイトをしているんです」
朗らかに身の上を語る、目の前の、さっき会ったばかりの人。全く知らないその人の、過去を想像する。息を詰めて話を聞き、私も自分の本当の気持ちを、感想を、その人に伝える。それは、すごく不思議な事で、でも全然嫌ではなかった。
自分が取るべき進路に迷い困っていると言った時、その人は言った。「ゆっくりでいいんですよ。僕もまた、一から探している途中です」と。そして、
「頑張ってください」

と手を差し出された。

固い握手を交わしてバスを降りた時、神戸の街に親しみを感じるようになっていた。

私の小さな旅は続いた。中華街の近くに多数あるという、雑貨屋さんに憧れていた。小さな雑貨屋さんの所在地は、グーグルマップで調べても分からなかった。私はスマートフォンを鞄の一番奥にしまい、自分の足でお店を探した。それはビルの陰にあったり、地下にあったり、コンビニの四階にあったりした。かわいらしい革細工。題名も聞いたことがない古本。何に使うのかさっぱり分からない、大きな大きな布。ノーヒントでお店を探しだして、初めて目にする商品を眺める。幼い頃に楽しんだ、「宝探し」とか「海賊ごっこ」以上にわくわくすることがこの世にあるなんて、私にとって大発見だった。

お店の雰囲気を味わうことも、楽しかった。音楽のかかっている店、かかっていない店。大きな窓のある店、商品が壁を覆い尽くしている店。「いらっしゃいませ」の一言だけで、あとは楽しげなスタッフ同士の会話が聞こえてくる店。私が店内を物色する様子を見て、「古切手って、可愛いですよね」と声を掛けてきた女性店主。

「このキャラクターのグッズを、世界で一番集めている店なんです」

と胸を張る店主もいた。私は世間話を楽しむこともあれば、「こんにちは」と「ありがとうございました」しか言わないこともあった。

全てのお店で共通していたのは、店主と店の雰囲気が皆ぴったり同じで、すごく居心地が良さそうだったことだ。

無理はしなくていい。ゆるゆると、自分のペースで歩んだ先で、思いがけないものに出逢えた。話題を捻り出さずに、黙っていてもいい。でも、知らない人と喋るというのは、びっくりするくらい素敵な体験だった。近過ぎる人には話せない事に対して、新たな視点からのアドバイスを貰った。出逢って五分の人の事を、大好きになった。

私の予測できない旅は、この夏一番の思い出になった。自分の肌と心で感じるという体験は、こんなにも鮮烈な記憶を焼きつけていくのだと、衝撃を受けた。私の知らないことがまだまだ世界にはあふれているのだと気が付き、ぞくぞくした。

――ああ、もう一度、こんな体験がしたい。

私は「ひとり旅」に恋をした。

高校生部門 優秀賞

強く生きたい

兵庫県立姫路西高等学校 一年
寺本 栞那

「じいちゃん、ラッパ教えて。」私が祖父の家に行くときの第一声はいつもこれだった。小学四年で初めてラッパを持ったあの日から私のラッパの先生は祖父であった。そう、祖父、だったのだ。もう過去の話なのだ。あの頃は何もかもが当たり前だった。教えてもらうことも、笑い合うことも。

祖父は私が物心ついたころにはもう病気を抱えていた。でも、何度も手術を繰り返し、そのたびに成功させる、強い人であった。本当に強かった。体調を崩し、入院することは何度もあった。だから、今回も私は（またか。）と、そう思っていた。受験まであと一ヶ月。精神的にも追い込まれていた私は、受験後にお見舞いへ行くことを決め、勉強に励んだ。

ただ、今回は何かが違った。最初は気付かなかった。でも、何かが変だった。そう、確かに感じ始めたのは、受験一週間前。父は酒をやめた。母は毎晩遅くまでパソコンに向かい弟は部屋に閉じこもりがちになった。変だった。わかっていた。祖父の命が危ないかもしれないこと、今までとは違うことに、私は気付いていた。でも知らないふりをした。認

めるのが怖くて、どうしても認めたくなくて、受験生という仮面をかぶった私は、認めざるを得ない現実から逃げた。

合格発表で合格を確認した数日後、母と病院へ向かった。そこで見た光景はあまりにも非現実的で、衝撃的だった。私は本当に何も知らなかったのだ。あれほど痩せ細っていて、あれほど多くのチューブにつながれた姿を、私は見たことがなかった。父、母、弟の変化の理由に気付くまでに、どれほどかかったのだろう。もっと早く気付いていれば、私にもできたことがあったはずなのに。涙が溢れそうだった。こらえた。流すと止まらなくなりそうだったから。

祖父に合格を伝えた。微笑んでくれた。ちゃんと伝わっただろうか、それとも、私にそう見えただけだったのだろうか。

三日後、朝早くに電話が鳴った。母、弟と私は、泣き叫びながら車を走らせた。信号が赤くても、関係なかった。暗闇に、叫び声だけが響き渡り、車のライトだけがまぶしくひかった。

間に合わなかった。もうあたたかさは消えかけていた。

初めて人の死に出会った。「ありがとう」なんて言わなかった。音も立てず、静かに消えていった。

もう祖父には会えない。ラッパを教えてもらえない。弟はラッパを始めたばかりであった。彼は何回祖父のレッスンを受けられたのだろう。もっと話したかった。教えてほしいこと、聞きたい事が、たくさんあったのに。

母は毎日泣き続けた。祖母の家に毎日通い、泣きあって、家に帰ってきてからも泣いていた。私だって、泣きたかった。誰かと話したかった。でもできなかった。

父と母は喧嘩するようになった。弟はその度に泣いていた。

みんな、悲しくて、つらくて、悔しくて。気持ちは一緒なのに、それなのに、ぶつかり合った。みんな、どこかで自分を見失い、私も、自分の居場所を見失った。

そんな時、私を救ってくれたのは、「トランペット」だった。ラッパを吹くと、悲しくて、つらかった。もっと私の想いを音楽に乗せて届けておけばよかった、そう悔やんだ。けれど、それでも、音と一緒にたくさんの想い出が蘇ってきて、私の祖父が、じいちゃんが、確かにここに存在していたことを、強い人であったことを、感じさせてくれた。

いつ頃からだっただろうか、次第に私たちの家族は、普通の生活をとり戻していった。忘れたわけじゃない。最初は忘れてしまおうとしていた。でも、忘れられるわけ、なかった。

私たちは今も日々、祖父の存在を感じながら生きている。祖父のような強い人になるために。祖父は、私の、母の、父の、弟の、祖母の、みんなの心の中で、今も生きている。

人の命。人の死はあまりにも突然すぎて、あまりにも静かすぎる。

当たり前の事が、いつ、どこで当たり前じゃなくなってしまうのかは、誰にもわからない。なくなってから気付いても、もう当たり前は帰ってこないのだ。だから、私たちはこの瞬間を全力で生きようとする。

強く生きたい。

祖父のような、強い人になるために。

高校生部門　佳作

手のひらの温度

兵庫県立姫路商業高等学校　一年
浦野　楓香

先日、私の祖父が脳出血で倒れ、集中治療室で眠っているということを聞かされた。私はそのとき、電話口から聞こえてくる祖母の声に、全く現実味が持てず、ふわふわと夢を見ているようなよく分からない心地のまま、祖父母の住む富山県の高岡市へ連れていかれた。ぼんやりとした心持ちとは全く違う方向に、臓腑はざわざわとした感じを持っていた。祖父は子供が好きな人であった。私や姉などのことを、厳しいながらとても可愛がってくれて、私も祖父に特別懐いていた。慕っていた祖父が突然倒れたという知らせに心が追いついていないことだけは、薄く霧のかかった思考でも理解ができた。学校を休むと友人に連絡している間も、頭は空っぽのままだった。朝ご飯を食べずにいたので、当然のように空腹を感じたのも、祖父にひどく薄情なものに思えた。頭にかかった薄っぺらい霧も、ショックを受けた顔をしたのに、生きるための栄養を欲する体も、何もかもが恥ずかしくていたたまれなかった。

車で移動している中、父と母が、もうすぐ亡くなるのではないか、心臓で倒れて二回目

だ、覚悟をした方がいい、と話していた。私は、両親の言った覚悟をしてはいけないと思った。大人には大人の事情があるのだろうが、勝手に頭の中で祖父を殺すことは、縁起でもない気がした。例えば、静かに逝ってしまう祖父を想像してみても、罪悪感がふくれ上がるだけで両親の言った覚悟は一切芽生えなかったと思われる。無駄な行為はしない方が良いと思い、結局私は車内では冴えた目を無理矢理閉じることで時間をやり過ごした。途中サービスエリアで朝食を買っていたが、私は食べられなかった。腹は確かに空いていたのに、食べてはいけないと思ってしまった。今思うとあれは、願掛けだったのかもしれない。

そうして富山に着き、病院で祖母に会った。祖母は、前に会ったときより、疲れた顔をしていた。僅かだが、白髪も増えていた。祖母は祖父の状況を説明してくれた。右腕と右足が動かないが、意識はあるということ、意識や記憶は混濁しているが元気であることを教えてくれた。明瞭な口調から、きっと何度も同じ説明をしてきたのだろうと思った。集中治療室は三人ずつしか見舞えないらしく、先に入って泣いて出てきた姉を思い、私もきっと泣くだろうと思いながらドアをくぐった。

不自然と思えるほど白い部屋、消毒液のような匂いがする清潔なベッドの上に、祖父はいた。ピッピッと音がして、祖父の身には沢山の管が沢山の機械に向かって繋がっていた。数値となって現れた祖父の命が、ゼロになったら息をしなくなるのかと思った。それは、

車内で想像した祖父の死よりも、夢のようでありえない光景に思えた。

だって、祖父は確かに生きていた。小さく傾げられた重そうな頭も、口から漏れ出る小さな呼気も、祖父が今ここに生きている証に思われた。そして、祖父の潤んでいるような黒目を見たときに、妙な安心を感じて、私は泣いてしまった。生きていて良かったと思い、祖父のしわがれた声を聴く度に涙が止まらなくなった。結局私は、一言も言葉を発することができなかった。

両親が握らせてくれた祖父の手は、記憶の中ではザラッとしてささくれていて温かかった。実際に握った手は、それよりも幾分か冷たくサラサラとしていた。心臓を、その冷えた手で握られたようにひやっとして、あまりの冷たさに心臓が跳ねた。だが、握り続けている私の手の温度はいつの間にか、緊張がときほぐれ柔らかな熱に戻り、祖父の手のひらの温度も、確かに人肌に戻った。私の手のひらと祖父の手のひらが繋がって、命の温もりを分けあっているように感じた。私の命の分を、少しでも祖父に分けたいと思って、私はぬるい祖父の命のぬくもりを、止められるまで握っていた。

泣いていた私に、祖母はあることを教えてくれた。自販機で買ったリンゴジュースを流し込んでは涙ぐむ私を心配してのことだったのかもしれない。

「じぃじ、風呂入っとる時に急に手足に力ぁ入らんようなったが。救急車呼ぼうとしたが

やけど、じぃじ嫌がって『嫌ちゃ』ばっかり言うとった。そがやけど、呼んでちゃんと助かったがいね。偶然、私がおったから助かったが。運の良い人やいね、なん大丈夫ちゃ。」

祖母の方が苦しかったろうに、そう言って私を励ましてくれた。私を励ましてくれた祖母の手のひらと、先刻握った祖父の手のひらは、似ていないのに、全く同じものに思えた。私はありがたい気持ちになり、再び飲み込んだリンゴジュースはどこか甘かった。

祖父は現在、一般病棟に移されたそうだ。電話越しの祖母の声に、ようやく私は現実味を感じることができた。

一般部門　最優秀賞

眼

兵庫県　伊丹市
本田　菜美（会社員）

夜の境内は異世界のように真っ暗だった。二の鳥居をくぐると、神社に隣接する公園から聞こえる音頭と太鼓の音は、境内の静寂に跳ね返されたように遠くなった。境内を取り囲むクスの木の向こう側で、提灯の赤い光がぼんやりと湿った空気ににじんでいる。まとわりつくような生温く湿った空気は、境内のひやりと冷えた空気に拭い去られた。私は弟の手を引いて賽銭箱の前まで歩いた。さきほど公園の隅で拾った五十円玉を引き取ってもらうつもりでいた。

五十円玉を拾ったのは、スーパーボールを諦めて帰ろうとした時であった。私と弟は、すれ違う子どもの手の中で踊る不思議なボールに釣られて、「スーパーボール」と書いた出店にたどり着いた。

たらいに張った水面に、いろとりどりの頭がぷかぷかと浮かんでいる。濡れた頭は屋台の光を浴びてうるうると潤い、今にも水に溶け出しそうである。弟は、その内、透明の球体に星型のスパンコールを浮かべたものに心を魅かれたようだった。財布を持って

いない小学生の私と弟は、しばらく時間を忘れて黙黙と見入った。そして、傍にいた客が弟のお気に入りを上手にすくったところで、はっと我に返った。

私は弟を連れて家に帰ることにした。屋台の並びを足早に通り過ぎて公園を出ようとしたとき、屋台の明かりが届かなくなったツツジの茂みの傍で、五十円玉を見つけた。

私はしばらく手の中の五十円玉を見つめながらスーパーボールを思った。しかし私の意思は、なかなかスーパーボールにたどり着けずにいた。何度思い立っても、あと少しのところで勇気がくじける。私は後押しを求めて弟に視線を移した。幼い弟の無邪気な催促を私は期待した。ところが勘定を知らない弟の目は、五十円玉ではなく私の顔をじっと見つめていた。その目は、先ほど見た半透明のスーパーボールよりずっと綺麗に澄んで見えた。その瞬間、私はその澄んだ目に、いま時分私の脳内で渦巻いていた迷いを悟られまいと思った。スーパーボールを消さなければ、とも思った。そう思ったときには、私は黙ったまま弟の手を引いて隣の神社へ向かっていた。

誰もいない境内のぴんとした空気に、五十円玉が賽銭箱を転がり落ちる音がからからと響いた。私は信心深い祖母に教わったとおりに二回手を叩いて、そして目をぎゅっと瞑った。何を祈ったわけでもない。私は五十円玉を手放すことで物理的にスーパーボールから解放され、それを神社へ奉納するという善行をもって未遂の悪事を清算しようと

していた。私は終始、私の心をじっと見つめる眼を意識した。

境内を出るとき、一の鳥居にほど近い参道の脇で、弟が何かを見つけてしゃがみこんだ。立ち上がったその小さな手にはスーパーボールが握られていた。半透明の紺色は砂にまみれて濁っていた。それでも弟は嬉しそうに、「お参りしてよかったなあ。」と言った。汚れのない弟の目に、スーパーボールは依然として輝いていた。そしてそれは、弟の頭の中で何の疑いもなく、五十円玉の奉納と美しい道理でつながったようであった。その小さな感動は彼の心を打った。

しかし私には、そのスーパーボールが先ほど出店で見たのと同じものには到底思えないほど汚れて見えた。それは、先刻私が心から追い出したそのものであるようにさえ思われた。それと五十円玉とのつながりは、私の心に小さな感動ではなく、ある種の畏れを生み出した。それは私に、なん時も私を見つめ束縛するなにかの存在を、確信させるものであった。

家に帰った私は、鈍色に濁ったスーパーボールを水で綺麗に洗って、弟にやった。

一般部門　優秀賞

ブルー・インパルス

兵庫県　姫路市
倉垣　裕太（高校常勤講師）

先日、姫路の空を航空自衛隊のブルーインパルスが飛び交った。姫路城改築記念のアクロバット飛行だ。私の勤務する高等学校からは遥か遠くの空を疾駆する機影を眺めることしかできなかったが、大人も子どもも皆が笑顔で空を見上げる光景は当日の晴天以上の爽やかさで私の胸に焼き付いている。

サッカー部の生徒たちとグラウンドから空を眺めていた私は、ふと「最近、空を見上げていないなあ」と思った。自分もそうだが、空を見上げる人を近頃あまり見かけない気がする。そしてそれは、今の子どもたちに顕著に感じられる。

私は仕事柄、部活動の遠征に生徒たちを連れて行くことが多い。しかし、ちょっとした暇があると、数十人の集団が皆黙って、スマートフォンを弄りはじめる光景には、いつも言葉にならない不気味さを感じる。思えば彼らは、新しい場所に行く時もスマートフォンのマップに頼って行動する。良さそうな店を探すのも、店構えを確かめる前にネットで検索し、隣りにいる友人と雰囲気に浸るのもそこそこに、写真を撮っては遠くの誰かとすぐ

ツイッター等で共有しようとする。彼らはその間、ほとんど、下を向いている。彼らには瞳を上げて、その土地の空の色や、風の匂いの違いを感じるような心は無くなってしまったのだろうか。

私の勤務校の屋上には電動ニュートン式の大型望遠鏡が一台設置してある。だが実は、その望遠鏡は今や埃をかぶり、かなり本格的に整備をしないと使い物にならないほどの深い眠りについている。一台の大型望遠鏡がその役目を忘れるほどの長い間、わが校の子どもが星々で煌めく夜空を見上げようと思わなかったのだ。その圧倒的な「ロマンの無さ」に、私は暗澹たる思いがする。

いま世界は、少なくとも日本は想像を絶する速さで「下を向く時代」になりつつあるのではないだろうか。

特にスマートフォンの普及は、ぞっとするほど革命的な力で、人々の視線を「下」に向けている。理解に苦しむ凶悪な犯罪が増えるにつれて醸成された、他者と関わったらトラブルが起きるような社会の空気感も、やはり人々の視線を誰ともぶつからない「下」へと誘導している。

子どもの頃、もっとたくさんのアドバルーンや飛行船を、私は見上げていたような気がする。しかし先日、たまたま飛行船を見つけた私は、辺りを見渡して愕然とした。周りの

群衆はみな思い思いに「下」を向いて、誰も空を見上げない。目的地を失った孤独なメダカのような飛行船の姿に、私は無性に泣きたくなった。

『気球よりも費用対効果の高いネット広告の方が合理的だ』

そんなビジネス的判断だけでは説明できない「下を向く力」が、いま社会全体に広がりつつあるのではないだろうか。

健全な肉体に健全な精神が宿るというなら、下ばかりを見る肉体には下ばかりを見る精神が宿る。心が疲れた時、あるいは自分に自信がない時、人は知らず知らずに下を向いている。そして下を向くことで更に心は滅入っていく。何度も自分の手首を見下ろしては、カッターナイフをあてがう人が出てきて、最終的には住んでいるマンションから飛び下りて、二度と帰ってこない人もいる。

自分より「下」を見ようとする心が、弱い者虐めを生む。「上」が「下」を搾取する資本主義は、いまや世界中を覆い尽くそうとしている。

今、私たちを捕える言いようのない閉塞感は、このような「下」を見る身体と心によって生まれている部分があるのかもしれない。

そう考えると、想像を絶するほどの人の波に耐えながら花火大会に出かける人々は、それでも何とか上を向こうとしている祈りに似た努力をしているようにも見えてくる。

私は、スマートフォンがいけないとか、うつ病を解決しようとか、そういった事を言いたいわけではない。
ただ、ブルーインパルスを見上げて人々が笑顔になったあの日、皆の顔を輝かせたのは飛行機だけの力ではなかったのではないかと言いたいのである。
ただ、空を見上げる。ただ空の広さ・青さを大きく呼吸する。それだけのことがどれだけ「健康的」かということを、あの日の晴天は証明していたのではないだろうか。
私は、教員として、周りから仮にのんき者だと馬鹿にされても、たくさんの生徒と共に、「空を見上げる努力」をしていきたい。
気が付けば、21世紀に入って、15年。
これからの若者にこそ、「下」を向く前に空を見上げて、大気圏を貫くような「青い衝撃」で世界を揺さぶってほしい。

一般部門　佳作

ある日、棺桶の中で

愛媛県　松山市
板東　英樹（会社員）

４０才で棺桶に入ることになった。別に私は余命宣告を受けていないし、世間一般で言われる人生の折り返し地点辺りをてくてく歩いているオッサンではあったが、８年前に煙草を止め、３年前に始めた水泳のおかげで健康診断の結果も良好である。私は、仕事で棺桶に入ったのだ。商社の仕事が「ラーメンからミサイルまで」と形容されるように、私の仕事も似ていて、様々な業種を担当できる点にやりがいと刺激を感じている。その日は、とある葬儀会社が主催する「終活イベント」のお手伝いをしていて、入棺体験コーナーを興味あり気に遠巻きに見つめるご年配の参加者たちの背中を押すため、私がデモンストレーションで棺桶に入ったのだった。

私が入ったのは、とある有名華道家がプロデュースした、よく言えば華やかな、悪く言えばド派手な花柄の棺桶だった。入棺体験コーナーは目玉イベントのひとつだったから、もっとも異彩を放っていたこの棺桶に身を任せることにしたのは自然な成り行きだった。入る前は窮屈そうに思えた棺桶だったが、私の身体全体を意外なほどスッポリやさしく包

み込んでくれた上、枕の高さも程好く寝心地がいい。遠巻きに見つめていたご年配の参加者たちが、亀のように首を伸ばしながら棺桶の中の私を見ようとにじり寄って来た。私は何となく仏様になったつもりで胸の辺りで手を合わせ、目を瞑った。

棺桶メーカーの営業さんが一通り説明を終えた後、私は少し薄目を開けた。すると、好奇に満ちたお年寄りの顔がさらに近くにあり、なんだか少し怖かった。棺桶の蓋が私の視界に入ってきた時は少し緊張した。別に閉所恐怖症でもないのだが、その蓋一枚が、この世とあの世の国境のように思えたからだ。蓋が閉められるまで見つめていた天井のＬＥＤ照明が、なんだか希望の光に感じられた。ゴトン…果たして、私は闇に包まれた。驚いたことに、棺桶の中の私を見ていたお年寄りたちの声が空気ノイズぐらいにしか聞こえなくなっていた。

暗闇に加え、蓋一枚で想像以上の静寂に包まれた私は、この世で完全に一人ぼっちになってしまった。人間はいつか必ず死ぬ。そして、死ぬときは、みんな一人。そんな当たり前の事実を改めて思いながら、仕事を言い訳に家族旅行を先延ばししないでおこう。とか、子供たちにもっとストレートに愛情を伝えよう。とか、嫁さんにもっと感謝を伝えよう。とか、元気でいてくれる両親にもっと親孝行しよう。とか、仕事で些細なことで腹を立てるのをよそう。とか、結構いろんなことをボーっと考えていた。蓋が閉じられていた時間

は随分長く感じられたが、後で棺桶メーカーの営業さんに聞いたら30秒くらいとのことだった。長いようでいて短い。人生も同じようなものなのかもしれない。

突然、一人ぼっちの私に希望の光が差し込んできた。「のぞき窓」が開けられたのだ。たくさんの顔が、棺桶の中の私を何か不思議な物体を見るような目で見つめていた。その瞬間、私は両手でピースサインをし、ありったけの笑顔を作っていた。「私は生きている、生きているよ！」そう伝えたかったのかもしれない。そんな私の無邪気な姿を見て少し安心したのか、入棺体験に人が集まり始めた。一組のご夫婦がやって来た。「あなたは入っちゃダメ」先に入ろうとした旦那さんに向かって奥さんが言った。「なんで？せっかく来たのに」ご主人が少し不満そうに言い返すと、「だって、そこのポスターに書いてあるじゃない。生きてるうちに棺桶に入ると長生きするらしい。って」いたずらっぽい笑顔を浮かべながら奥さんが言うと、旦那さんはお手上げといった顔で私たちを見た。棺桶のまわりに自然と笑い声が溢れた。このご夫妻のように私も妻と歳を重ねていきたいと思った。

光しか知らない光より、闇の存在を知っている光のほうが、光として輝ける。人生も多分同じだ。生きることだけに目を向けるのではなく、いずれ来る死としっかり向き合うことで、逆に生きることへの歓び、愛する人たちへの感謝や労りの気持ちへの輝きが増し、よりよい人生につながるのではないだろうか。「明日があるさ！」と思って生きるより、

「明日はないさ！」そう思って生きるほうが実は前向きな人生なんじゃないか？とさえ思えてくる。まさか、人生の終わり方を考える「終活イベント」という場で、これほどまで「生きること」について考えさせられるとは。まるで遊園地のアトラクションのように入棺体験を楽しむおじいちゃん・おばあちゃんの笑顔を見つめながら、私はそんなことを考えていた。

平成 27 年度　第 1 回 藤原正彦エッセイコンクール
概　　要

■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

プロフィール

昭和 18 年 旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。
昭和 53 年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成 22 年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成 26 年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。
そのほか、『国家の品格』『決定版この国のけじめ』『天才の栄光と挫折』など著書多数。
平成 26 年 4 月、姫路文学館長に就任。

■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400 字詰め原稿用紙 5 枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。 平成 27 年 9 月 10 日〆切。

■　賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各 1 編。
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

■ 応募状況　…　応募総数　1，2 1 1 点

部門別　応募数		兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	**224 点**	216	8	224	0	0
高校生部門	**163 点**	32	128	160	3	0
一 般 部 門	**824 点**	157	215	372	450	2
合計	**1,211 点**	405	351	756	453	2

中学生部門：学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）23 校、個人応募 6 人。
高校生部門：学校応募 10 校、個人応募 5 人。
一 般 部 門：10代から80代まで各世代から応募があったが、そのうち60代以上が過半数を占めた。
他府県からの応募は、北海道から沖縄県まで全国各地に及んだ。
海外からの応募者 2 人は、いずれもイギリス在住者（日本人）。

■ 表彰式

日時：平成 27 年 11 月 28 日（土）13 時 30 分 ～ 15 時
会場：姫路市文化センター　小ホール